

いかに継承されてきたか」という観点からの研究は多くなかった。そのなかで、講の浸透と継承を地域の文化的・社会的基盤との関係から明らかにした本書は講研究における新たな成果と位置づけられよう。また、著者は前著で江戸時代の三峰信仰の広がりを地域的基盤と結びつける形で考察したが(三木, 2010), こうした視点は本書においても貫かれているとともに、その対象時期を現代まで発展・深化させたと捉えることができる。

一方、宗教社会学者の天田によると、従来「人びとの暮らしのなかにあった講」が、近年は文化遺産(貴重な民俗資料)や観光資源として、また失いつつある地域の「つながり」を結び直すものとして捉えられはじめているという(天田, 2014)。後者のつながりという点は著者が第5章で示した講の現代的意味とも関連する。今後はこうした従来とは異なる文脈のなかでの講活動のあり方や意味づけ、またその「変化」に対する講員および地域の意識などについて注視していくことも必要かもしれない。

最後に、本シリーズには本書と同じく宗教を扱った今里悟之著『平戸の島々はなぜ宗教が多彩なのか一島の地域誌一』が刊行されている。同書は長崎県の平戸島を対象に、カトリック、神道、仏教、修験道などのさまざまな宗教の混在・融合を考察した内容であり、本書と比較しつつ読み進めることで地域と宗教の関係をさらに理解することができるだろう。こちらも一読をお勧めしたい。

(卯田卓矢)

## 文 献

- 天田顕徳(2014): 講の社会的位置づけの変遷, および講研究の射程に関する一考察. 長谷部八朗編『「講」研究の可能性Ⅱ』慶友社, 284-314.  
 講研究会編集委員会編(2022): 『人のつながりの歴史・民俗・宗教一「講」の文化論一』八千代出版.  
 米家泰作・山村亜希(2024): シリーズ「日本の地域誌」

- に寄せて. 三木一彦『房総で講はいかに継承されてきたか一信仰の地域誌一』古今書院, ii - iii.  
 櫻井徳太郎(1962): 『講集団成立過程の研究』吉川弘文館.  
 櫻井徳太郎(1976): 講. 和歌森太郎ほか編『日本民俗学講座3 信仰伝承』朝倉書店, 97-120.  
 鈴木榮太郎(1940): 『日本農村社会学原理』時潮社.  
 民俗学研究所編(1951): 『民俗学辞典』東京堂.  
 三木一彦(2010): 『三峰信仰の展開と地域的基盤』古今書院.

**須山 聡**: 『奄美雑話: 地理学の目で群島を見る』海青社, 2024年2月刊, 127p., 1,700円(税別)

本書は、著者が奄美群島の主要紙である南海日日新聞に連載を続ける『新・奄美群島の地域性』の記事をもとに、それを加筆・修正し、刊行されたものである。著者の須山聡氏は、1980~90年代、石川県輪島市の漆器産業地域をはじめ、主に在来工業に関する地理学的研究に取り組んでいた。そんな彼が、研究者として大きく舵を切ったのは、2001年のことであり、大島紬産業の視察に行っことが契機になったという。この時、奄美の魅力に惹きつけられた著者は、それ以降、奄美大島を中心に奄美群島へ足繁く通うことになる。現在では、奄美研究、さらには日本の島嶼研究を牽引する研究者へと見事に転身し、加えて、奄美観光大使も務めている。

2014年、著者は『奄美大島の地域性: 大学生が見た島/シマの姿』を刊行した。ここから、前述の連載記事のタイトルに“新”が付けられた理由が推察できよう。また、奄美大島を中心としながらも、連載記事は同紙の主な取材対象地域である群島の他の島々も包含している。10年前の前作は、研究活動・教育活動を融合させながら、多種の地理学的ツールを巧みに駆使した、過去10年間の学術的成果であった。対する今作は、新聞の連載記事を通じた、奄美群島民に向けたアウトリーチ活動と政策提言を集約したものである。書

籍化を通じ、奄美群島に関心を持つ内外のより広い読者層に対し、その知見を提供する機会が確保された。比較的に安価であり、一般読者にも手に取りやすい。

本書の主な構成は、以下の通りである。

振り出し——なぜ奄美に？——

- I 自然環境と世界自然遺産
- II シマの文化景観
- III 離島の都市、名瀬
- IV はたらく島
- V 島とナイチ  
中入り

「振り出し」がまえがきに、「中入り」があとがきに相当する。I～Vの各章は、三～五つの本節とそれに続く小括の節を合わせた、全四～六つの節から構成される。各章では、奄美群島を特徴づける枢要でヴィヴィッドな 이슈が取り上げられ、その内容にも読み応えがある。

I「自然環境と世界自然遺産」では、まず奄美群島に温泉が所在しないことを話の切り口に、そこから群島の自然地理学的な成り立ちと奄美に固有種が存在する理由を一般読者にもわかりやすく説明している。その後、野生生物島外持ち出し禁止条例の提案、アマミノクロウサギなどの固有種のロードキル問題、今日群島内で多くみられ島民の生活に溶け込んでいる外来種アカギの伐採を巡る議論を取り上げている。これらは全て、2021年の世界自然遺産登録に関連し、相互に通底するトピックである。

他の多くの地域でみられるように、世界遺産への登録とそれによる島外からの来訪者の増加に対し、今後奄美でも保全と活用をめぐる対立が生じることが予見されるが、その中でも奄美を特徴づける“てげてげ”なコンセンサスの形成を前向き

に論じるとともに、奄美群島のヒトがもつ資源である“寛容さ”を積極的に評価している。奄美群島はこれまで、琉球、薩摩、日本政府、アメリカ政府など、外部の主体に翻弄されるとともに、判断や決定をその外部に委ねてきた。21世紀を迎えた今こそ、奄美の人々による奄美のための“自己決定”を実践するよう、島民を鼓舞する著者の姿勢が読み取れる。

II「シマの文化景観」においては、まず奄美群島の各々の“島”の中に“シマ”が存在することが提示される。この片仮名のシマは、空間的には“集落”を示すが、“生産”の枠組みでもり、さらには個人の存在が大きな意味を持つ“人間関係”の基本的な枠組みでもあるという。

20世紀半ば以降、シマの概念はさらなる拡がりを獲得したと指摘される。都市において、シマ単位で組織される同郷組織“郷友会”がそれにあたる。郷友会という、マチの中のシマにおいて、同郷者は相互扶助し、都市での生活を成り立たせてきたという。郷友会は、本土の都市のみならず、奄美大島の中心都市である名瀬にも多数組織されている。名瀬に郷友会が立地することは、奄美群島のシマの人々にとって、名瀬が異郷の地であり、シマとは異なる特性を持つマチであることを示唆するとの指摘には評者も深く首肯した。

このほか、同章では、シマのコスモロジー、災害とシマ、高倉は語る、ケンムンの島などをテーマに、シマの環境や空間構造について、単なる形態的な土地利用ではなく、奄美の文化・自然観などと結びつけた深い洞察が導出されている。その上で、人口減少や耕作放棄などが進む、シマの現況を“危機”と捉え、住民の能動的な働きかけを促している。

III「離島の都市、名瀬」は、奄美群島の中心地である名瀬にフォーカスを当てた章である。前章のシマと対比的なマチが対象とされ、理解のしや

すい構成となっている。離島都市へと発展した名瀬の“なぜ”について、複数の章で“謎解き”が行われるが、著者の専門の景観地理学の視角から、“景観レイヤー”に着目した節は、ユニークな論が展開され、特に読み応えがある。この節（Ⅲ-2）は、本書内では、例外的に学術論文（須山2023）の内容に依拠している。そのため他の節に比べ、やや専門的であり、一般読者の中には難解に感じる人もいるかもしれない。その一方、一定の関連知識を有する読者にとっては刺激的な内容であろう。

“大島紬と住宅”に関する節も、評者にとって、特に興味深い節の一つであった。大島紬産業は、戦後奄美の経済の盛衰を明快に示す産業であり、それを物理的に表象するのが、1960～70年代に紬業の経営者らが織り子を住まわせるために建造した“紬アパート”である。現在、多くが一般向けの賃貸住宅となっているが、老朽化の問題が貸し出しの障害になっている。近年のU・Iターン移住者の増加とともに、名瀬市街では住宅が不足するとともに、賃料の上昇が問題となっている。著者は、紬アパートの改修により名瀬の住宅ストックを増やすことに加え、紬産業の歴史を伝える大島紬博物館の建設の提案をしている。奄美における移住者研究、および住宅問題に深く関連するジェントリフィケーション研究を齎った評者からみても、この提案は現実的かつ効果的なものとして映った。

Ⅳ「はたらく島」は、奄美群島最大の産業は何でしょう？という読者への問いかけから始まる。その答えは、医療・介護・福祉である。これらの業種の経済構造を日本に復帰した1954年以降、奄振（奄美群島振興開発特別措置法）を財源とした公共事業に依存した群島内の経済構造と比較している。公的資金（＝本土）から支出・再分配される点において、一見して両者は同様に見えるが、利益を本土ゼネコンに回収された公共事業投資に

比べ、現在の主産業である医療・介護・福祉はカネが島外に流出しにくく、その経済循環を肯定的に捉えている。

続く節では、主に観光について触れられている。ゲストの期待に応えることを徹底するのではなく、ホストの「らしさ」をゲストに理解してもらう観光、マストურიズムではなく、少数の観光者でありながら一人当たりの単価の高い観光が奄美の目指すべき路線であると提起される。また、沖縄と同様の観光手法が、奄美では実現困難であることが示され、安易な焼き写しの発想に釘を刺している。

Ⅴ「島とナイチ」では、初めに“ナイチと内国植民地”が取り上げられる。当然、今日においても北海道や奄美・沖縄は、国内的にも国際的にも日本の領土の一部であり、“内地”として位置づけられる。しかし、それにも関わらず、奄美の人々が本土（ここでは、北海道・本州・九州・四国）を指し示す際、“ナイチ”の語が使われている理由は、彼・彼女らが、自らが暮らす群島が内地ではなく、内国植民地として“扱われている”ことを認識するとともに、批判を込めてこの語を用いているのだという。著者も言及する通り、現在、評者が暮らす北海道でも、本土を指してナイチの語が用いられる。しかし、ここでのナイチの指示対象は本州・九州・四国である。近代国民国家・日本への編入において、北海道（1869年）と奄美・沖縄（1879年）は10年しか変わらないが、国土の北／南の末端に位置する二つの地域の位置づけは、現代日本の国土空間においても、大きく相違することが示唆される。

1953年12月25日に日本へ復帰するまでの約8年間、奄美群島はアメリカ軍政下に置かれた。琉球、薩摩、日本、アメリカ合衆国を経て、1953年、奄美は再び日本の統治下となったのである。返還に際し、奄美と沖縄の地理的定義を巡る問題が重要であった。本章は日本政府・アメリカ政府・奄

美の各主体が作成した各資料内での呼称を抽出・分析することで、奄美のテリトリーに関する定義の曖昧さを明らかにしている。日本本土・アメリカのいずれからも、沖縄と同一視または混同されたまま、奄美群島が復帰した当時の状況を論じている。また、この状況を現在のナイチの観光者の目に映る奄美が依然として沖縄の二番煎じのイメージに象られている点と重ね合わせている。奄美の独自性を獲得することにより、本当の意味での復帰（または返還）が果たされると主張する。

このほか、日本復帰に関する新聞記事を対象に、テキストマイニング分析を試み、復帰に対する島民の認識の変遷を明らかにしている。復帰運動の体験者が少なくなった今日、運動の“物語化”のほか、運動に関連する重要な場所を“聖地化”する動きも進行し、継承に向けた準備が整ってきているという。それを踏まえ、“奄美”と“本土日本”との関係性を問い直すことこそが、復帰運動についての現代的な問いかけであるとしている。

以上の通り、本書には、奄美を端的に特徴づける種々の要素が凝縮されている。初学者にとって、奄美がどのような地域かを理解しやすい内容になっている。著者は、奄美というフィールドを通じ、これまでも研究・教育を有機的に結びつけてきた。両者の成果をまとめた前作から10年を経た2024年に刊行された本書は、これまでの研究・教育の活動をベースにしなが、特に地域・社会への貢献を果たすものとして位置付けられる。地理学者として、奄美研究者として、自身が常にヒューモラスかつ誠実に思考を続けるとともに、学生が持つ柔軟な眼差しの向こう側に目を凝らしながら、地元住民との対話にも正面からグラウンド・レベルで取り組んできた著者だからこそ辿り着けた到達点といえる。

その一方、本書には若干だが気になった点も認められた。例えば、「島ツチュ」と「シマツチュ」

に関する記述に関して、それらが島民と集落住民を示す旨の説明がないため、戸惑う読者がいるかもしれない。前述の通り、本書は奄美群島の主要紙の連載記事をもとに刊行されたものである。同紙の読者層（大半が群島住民）にとっては、言うまでもなく理解できるかもしれないが、本書の読者層をより広く設定するならば、十分な前提知識を持たない人に対する、より丁寧な説明があってもよかったのではないだろうか。

とは言え、こうした指摘が一種の粗探しや無い物ねだりであることは評者も十分に認識しており、本書の価値を否定するものではない。まだまだ多くの疑問や不思議に包まれ、魅力溢れる奄美について、専門的知見を交えながらも、これだけ分かりやすく、尚且つ愉快で親しみやすい文体で書き上げた書は他に類を見ない。奄美の住民・出身者、地理学や関連分野の学生・研究者・中高教員はもとより、最近奄美に関心を持つようになった一般読者を含め、幅広い読者層に対し、奄美群島に関する深い地域理解を促す本書が果たす功績は計り知れない。

最終章のタイトルが「中入り」とされることから推察できる通り、新聞の連載はまだ続いている。また近年、著者は奄美において、住み続けるための“集落点検”や市民向け“巡検”の開催など、他のアウトリーチ活動も並行して行っている。20年超の奄美研究の経験を通じて潤沢な知識を蓄えた著者にとって、時間いっぱい、ここからが地理的知識を地域へと還元する本領発揮の時である。

(高橋昂輝)

## 文 献

- 須山 聡編 (2014) : 『奄美大島の地域性：大学生が見た島／シマの姿』海青社。  
 須山 聡 (2023) : 奄美大島, 名瀬の都市景観の特徴：景観レイヤーを用いた総合。駒澤地理 59 : 1-25。